

仙台青年



SENDAI YMCA NEWS



第34回タイ農村ワークキャンプ

2020年2月23日(日)～3月5日(木)

—異文化の本物体験—

タイの匂い、それは空港に降り立った瞬間、日本の日常生活では嗅ぐ事のない匂いでした。タイの気温や湿度、食事、文化、タイ人の気質など、匂いも含めて言葉としてネットを通じて調べることはできます。しかし、本物に触れる機会は日本で生活している上ではほとんどありません。また、日本とは違う社会問題（人身売買や貧困問題など）にも触れません。

第34回タイ農村ワークキャンプは、2020年2月23日(日)～3月5日(木)の日程で実施します。これまでの参加者は、大半が多感な時期を過ごしている大学や短大、専門学校に通っている学生たちです。今回の参加者はまだ確定していません

が、多くの学生が下記の目的を持ってタイで12日間の活動を行ってきます。

参加者にとって、異文化の本物体験を仲間と共に、かけがえのないワークキャンプになるよう、引率者として責任を持って活動を行ってきます。このような機会を与えていただいたことに感謝して。
(健康教育事業部：黒田 敦)

<タイ農村ワークキャンプの目的>

- ①タイ農村部のコミュニティに必要な施設を作る
- ②訪問国の人々との交流を通し、文化・歴史・生活等々について理解を深める
- ③「共に生きる」ことの意味を学び、人々との出会い、交わりを深める

仙台YMCAの使命

私たち仙台YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の生き方に学びつつ、青少年の全人的成長を願い、このわざを東北の地に広げるための活動を行います。

共に生きる社会をめざします。

私たちは、すべての人が喜びと痛みを分かち合う、豊かな愛と希望に満ちた社会の実現に努めます。
喜びのある生き方をすすめます。
私たちは、すべての人が、生涯にわたる学びと交わりをとおし、共に成長できる生き方をすすめます。
世界平和の実現に努めます。
私たちは、歴史をふりかえり、一人ひとりの人権とすべてのいのちが尊ばれる世界の実現に努めます。

地球環境を大切にします。

私たちは、地球環境を守り、自然と人との共存をめざします。
ボランティアの働きを地域社会に拡げます。
私たちは、人と人とのかかわりを豊かに育み、隣人に仕えあう喜びの輪を拡げます。
子どもたちの生きる力を育てます。
私たちは、子どもたち一人ひとりの個性を尊重し、子どもたちが自発性に富み、自立心豊かでたくましい人間に育つよう支援します。

仙台YMCA幼稚園

仙台YMCA幼稚園の保護者の方々と結成されている人形劇サークルを紹介します。

30年以上続いているこのサークルは、途中で園児の減少と共に存続が難しくなったことがありましたが、6年程前に「こんなに素敵な人形や舞台備品を使わないのはもったいない！」と、数名の保護者の方々が立ちあがってくださり途切れることなく続いています。ここ数年は

サークルに所属している方以外も、都合の良い時に練習に参加する、自宅でお人形の髪の毛をつける、演技をしている方のお子さんの託児をするなど、たくさんの方が無理なくサポートをしてくださっています。今年は11月15日にホールにて公演をさせていただきました。保護者の方、未就園児親子、近隣の小規模保育園の方々もご招待しました。とても完成度が高く大人も楽しく、感動する人形劇でした。これからも是非続けていただけるよう願っています。

(仙台YMCA幼稚園 園長/高橋 祐子)

<人形劇サークル/新井杏子さん>

集合写真には写っていませんが、この2ヶ月練習時に毎回来て手伝って下さった方、下の子の様子を見ながら何度か顔を出してくれた方、仕事が休みの日だからと手伝いに来てくれた方、合わせて30人以上のお母さんが関わって下さいました！お母さん方が本当に多才で、それぞれの特技を活かして、あれよあれよという間に出来上がり、最終的にはとてもいい人形劇に仕上がることにいつも感動します。子ども達の笑顔が見たいからと言って参加してくれるお母さん方ですが、そのお母さん達が誰よりもケラケラ笑い、真剣に取り組み、もしかしたら子ども達以上に(?)楽しんでいるところが素敵だなとも思います。子どもはもちろん、自分自身も楽しかった、そんな子どもと共通の思い出を持たれたことに感謝いたします。



YMCA南大野田保育園

YMCA保育園の目指す子ども像は「いきいきとして意欲(やる気)があり思いやりのある子ども」です。今、目の前の子どもたちの姿を見てみると、興味のある遊びを見つけられず保育者から離れられない子どもが多くなっていました。

『一人ひとりが興味のある場所で、好きなことを十分に楽しめるようにしたい！』『遊びの中で、自然に体の動き作りができるような環境にしたい！』とってはいるものの、以前の南大野田の園庭はまさに「ザ・運動場」。私たちが目指しているものとは真逆の園庭でした。まずは子どもたち自ら意欲的に遊びを考えられる園庭を目指し小さな築山と溝を作ることからスタートしました。高低差のある場所ができたことで、平面を走る時よりも少しおもしろさが加わり、大きい子の動きを近くで見ていた0歳児の子どもたちも四つ這いで登り始め「見てみて！」とこの頃から子どもたちの遊び方、目の輝きが変わってきました。

保護者の方からもたくさんご協力をいただき、工事現場などにある糸巻きをご寄贈いただいたり、ブランコの枠にロープをつないで綱渡りができるような場所にしました。挑戦することで満足感や達成感を全身で感じています。さらに、手作りの木製椅子やテーブル、ご家庭で使用しなくなったタイヤ、ビールケースなど、遊び方を変化させて楽しめるような道具や素材をたくさん準備することで、子どもたちの遊びも日増しにおもしろくなってきています。

園庭改革はまだ始まったばかりです。子どもたちの生きる力を育てるために、YMCAだからこそできることを大切に考え子どもたちの「やってみよう」「やった！できた！！」の実現を目指し、豊かな育ちの場を提供できるよう努力してまいります。

(YMCA南大野田保育園/木村 由佳)



YMCA加茂保育園



わくわくふれあい遊びでひかり組の子どもたちが竹登りに挑戦しました。使う竹の手配の仕方を近隣の方に相談すると、子どもたちのために親身に相談にのってくださり子どもたちが登るのにちょうどいい太さの竹を届けてくださいました。当日は台風で残念ながら中止になり全保護者の前で披露することができませんでしたが、後日ひかり組だけのわくわくふれあそびごっこで、ひかり組の保護者に竹登りを披露することができました。この時の子どもたちの自信に満ち溢れた表情は忘れることができません。困った時、私たちの力だけではどうにもならない時に「こんな方法があるよ」「やっておくから任せおいて！」という方が加茂保育園の周りにはたくさんいらっしゃいます。

これからも地域の方とのつながりを大切に、このつながりに感謝しながら、ここに『YMCA』があってよかったと思っただけの保育園になるよう、これからも努力してまいります。
(YMCA加茂保育園/岩根久仁恵)

YMCA西中田保育園

保育園ではアドベント(待降節)に入り、イエス様の誕生を待ち望む特別な期間を迎えました。リース・聖家族など、子どもたちと一緒に保育室の飾りを増やし、クリスマスを迎える準備を進めています。先日の1歳児クラスの出来事です。もみのきの飾りをじっくりとみつめ、大切にふれながら「きれい」とつぶやく男の子...振り向いて思いを保育者と共有すると、満足するように顔色再び飾りを見つめます。おうちの人へのクリスマス制作をしていたお子さんは、「ママはきいろ...」とおぼつかない指先で黄色を選び、そのまなざしは真剣です。保育園にはありふれた風景ではありますが、「感動に出会い味わう時間」「小さいながらも相手を思う姿」に、平和で穏やかなクリスマスが近づいてくることを感じ、幸せな気持ちに満たされました。

現在は、楽しく賑やかでプレゼントをもらう日というイメージが強いクリスマスですが、世界中では目を覆いたくなるような紛争や災害があることも事実です。0～5歳児まで愛と安心に包まれる日々の中で、私たちの当たり前がすべての人の当たり前ではないこと、そして、自分にできることはないか子どもたちと一緒に考えることを大切にしながら、「まわりの人に心を寄せるクリスマス」を迎えたいと願っています。
(YMCA西中田保育園/関川美紀)



YMCAと私

ポップクラブ



ポップクラブ 保護者 / 高橋 知子 さん

「今日のお迎えは誰？」毎朝、二人の息子たちに聞かれる決まり文句です。共働きの我が家、加えて面倒を見てくれる祖母も現役で仕事をしているため、ポップクラブのお迎えは日替わりです。年子の二人の息子たちが小学校入学とともにお世話になっているポップクラブ。プールは保育所時代からメンバーとなり、週1のプールをとっても楽しみにしております。二人ともスポーツが大好きで、サッカーも含めてYMCAのプログラムにはどっぷりはまっている我が家です。学校が終わってから過ごす時間は、ほぼYMCAタイムです。リーダーの皆様は子供達、そして保護者との信頼関係構築はもちろん、二人の子供の性質をしっかり見てくださり受け止めてくださっています。仲間との関わり方や、過ごしている様子をうかがい、家庭でもYMCAでの話題には事欠きません。

普段の生活の他にもキャンプやワンデイプログラムなども通して、相手を思いやる気持ちや愛情を育むことが出来ていると強く実感しております。YMCAは子供ながらにそのコミュニティにおいて人として成長できる場所でもあります。様々なプログラムに、時には親子で参加してひと時を過ごす場面は、普段なかなか感じられない子供たちの成長を見ることができる貴重な時間でもあります。ずっと一緒に居られないだけに、YMCAを通じて親子で時間を共有し、成長させていただいております。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。



～クリスマスの物語～

日本基督教団石巻栄光教会
牧師 / 川上直哉

今年の11月、紅葉の美しい京都へ行きました。高山右近というキリシタン大名の屋敷跡を訪ねて、伏見に行ったのでした。日本酒で有名な「月桂冠」の大きな敷地の中に、その道はありました。高山右近の屋敷跡につながる小道が、立派な看板と共に、当時の位置に、そのまま保存されていたのでした。実際には、この場所に、高山右近の屋敷ではなく、イエズス会の教会があったそうです。今から400年前、ここでもクリスマスが祝われ、ナタルの歌（当時のクリスマスの歌）が歌われた。そう思うと、自分の生きているこの毎日が、一つの大きな物語の一部になったような気がします。

高山右近の屋敷跡から近いところに、物流の拠点・伏見を支えた水運の大動脈・宇治川派流があります。そこにかかった橋を渡ると、朱色の壁が目飛び込んできます。辨財天を祭ったお寺でした。特徴的な山門をくぐると「ジュディオングさんの言葉」が看板に書かれて展示されています。小さな、不思議な、でも素敵な空間でした。後から知らされました。この辨財天を祭ったお寺は建長寺といい、その周辺には遊郭があったそうです。いくつもの落語等で、江戸時代の遊郭に働く女性たちの苦しみは、よく知られています。人間としての尊厳を踏みにじられ、使い捨てにされる女性たち。その女性たちの生きる世界は、絶望の色に塗り固められていたことでしょう。そこに、鮮やかな朱色のお寺がある。遊郭の女性たちにとって唯一、自分の尊厳を示す手立てとして残されていた「技芸」を象徴する神様（辨財天）が、そこに祭られている。その境内には小さくても心のこもった庭があり、現世と来世の幸せを祈るための立派な場所（護摩炉）がある。「自分たちも幸せになれる（はずだ）」ということ思い出させる装置が、この小さな空間に、心を込めて整えられている。人は、物語の中を生きることで、人生を歩みます。絶望へと進む物語の中に閉じ込められた時、その人の人生は、ひたすら暗い日々となるのです。でも、どんなにつらい中にあっても、幸せへとつながる物語を生きる時、その人生は絶望に沈まない。伏見の建長寺は、そのことをはっきりと物語っていました。

クリスマスの物語は、まさにそうした物語です。「子どもを産む道具」として扱われた女性たちが主人公です。その一人はマリア。周囲が認めない妊娠をしました。だから、世間は彼女ごと、その胎に宿った命を消し去ろうとしました。マリアはひとり、その命を守ろうとした。そして、心ある数名の勇気が彼女に協力をし、そして最後に、おなかの赤ちゃんが母であるマリアを守った。その不思議な命の輝きを、世間から使い捨てにされていた人々（当時の羊飼い）が見にやってくる。そこに、自分たちの救いの徴（しるし）があると、天使に告げられて...クリスマス物語とは、そういうお話です。今年もこの物語が語られます。絶望の中に沈みかけている人に、この物語のメッセージが届きますように、祈っています。



TOPIC

日本宝くじ協会様よりテントが寄贈されました



今夏、日本宝くじ協会様より仙台YMCAの幼稚園・保育園にテントをご寄贈いただきました。いただいたテントは夏祭りや運動会、その他、プール遊びや日々の保育の中で、日差しから皆を守り、活躍していました。ご寄贈に感謝いたします。